

# 稲作だより

## ～第1号 育苗準備編～

【発行】北村山農業技術普及課 TEL0237-47-8631

### 春作業は計画的に!! 催芽はあせらず、芽切れを確認!

#### 1 春作業の予定を立てましょう

移植予定日から逆算し、計画的に塩水選や播種作業を行いましょう。健苗育成のため、当面の気象を考慮し、ムリやムダのない効率的な作業となるように計画しましょう。近年、播種量が増加傾向となっていますが、育苗期間が変わっていない事例も見かけます。播種量にあった育苗期間で計画しましょう。

##### 作業スケジュールの目安 <種籾の準備から移植まで>

苗種 (葉齢)	塩水選 種子消毒	浸種	播種時期 (播種量/箱)	育苗期間 (10a 当たり箱数)	移植時期
中苗 (3.5 葉)	3月下旬～ 4月上旬	積算水温 120℃ (目安) 12℃×10日	4月10～20日 (芽出し籾 100～ 140g)	35日 (30箱程度)	5月15～25日
稚苗 (2.5 葉)	4月上旬～ 4月中旬		4月20～30日 (芽出し籾 160～ 200g)	25日 (25箱程度)	

※移植予定日から逆算して計画的に作業を行いましょう。

#### 2 塩水選 «充実した籾を選びましょう»

塩水選の前に比重計で塩水の比重を確認しましょう。

塩水選後はよく水洗いし、籾に付着した塩分を取り除きましょう。

調整の目安 (水 10 粒に対して)

うるち米	もち米
比重 1.13	比重 1.08
食塩 2.1kg を溶かす	食塩 1.3kg を溶かす

#### 3 種子消毒 «ラベルで使用方法を確認しましょう»

##### ○薬剤処理

農薬ラベル等で使用濃度や浸漬時間、浸漬後の風乾の有無などを確認し、適正使用を徹底しましょう。浸漬時の温度は10℃以上としましょう。

県内でスポルタック剤(プロクロラズ剤)耐性ばか苗病菌が確認されています。前年にスポルタック剤を使用してばか苗病が発生した場合には、他の薬剤(テクリードCフロアブル(イプコナゾール剤)等)に変更してください。また、耐性菌出現防止のため、同じ種子消毒剤の連年使用は避けましょう。

##### ○温湯消毒(うるち品種のみ)

温湯浸法は、処理方法を誤ると効果が得られなかったり、発芽率が低下したりします。個人で実施する際には、山形県農作物病害虫防除基準を参考にし、塩水選後の処理や浸漬温度、浸漬時間などに注意しましょう。

初めて取り組む方は、最寄りの農協、普及課等にご相談下さい。

## 《温湯消毒した種子の取り扱いについて》

温湯消毒種子は無菌状態のため、病原菌が付着しないよう注意が必要です。

温湯消毒後は速やかに浸種しましょう。すぐに浸種できない場合は、通風乾燥機等で籾水分を15%まで低下させ、清潔な場所に保管してください。

## 4 浸種 《温度に注意し、発芽を揃えましょう》

- ①浸種水温は、12℃以上15℃未満で行ってください。(15℃を超えると、ばか苗病の発病率が高くなります)  
※特に最初に水漬けた時の水温が低すぎる(5℃以下)と発芽率が低下する恐れがあります。水温が12～15℃であることを必ず確認してから、種子を水に漬けましょう。
- ②品種ごとにラベルを付ける、色違いの網袋を利用するなど、異品種の混入(コンタミ)に注意しましょう。
- ③水道水等のきれいな水を使用し、水量は種籾の2倍量以上とし、酸素補給と雑菌繁殖防止のため2～3日おきに水を交換しましょう。
- ④種籾は小分けし、時々上下を入れ替えるなどし、浸漬中の温度ムラを防ぎましょう。

浸種期間の目安

品 種 名	積算水温	浸種日数
		水温12℃
つや姫、雪若丸、はえぬき、ひとめぼれ、あきたこまち、コシヒカリ	120℃	10日
ササニシキ、ヒメノモチ、こゆきもち	100℃	9日

※令和6年産の種子は、高温で登熟した影響で休眠が深い可能性があります。目安となる浸種の水温・日数・積算温度を必ず確保しましょう。

## 5 催芽 《伸ばしすぎに注意》

催芽温度は30～32℃が適温で、芽(鞘葉)と根が1mm出たハト胸状態にします(右図)。

十分に浸種した籾であれば、約20時間でハト胸状態となりますが、令和6年産種子は発芽に時間がかかる可能性があります。必ず9割以上の芽切れとなるまで催芽を行いましょ。



○ハト胸状態

×伸ばしすぎの状態

## 6 土づくり《気象変動に備えましょう》

土づくり肥料を毎年施用している圃場では、令和5年の猛暑でも整粒歩合の低下が軽減されました。気象変動に負けない米づくりのために、土づくり肥料(目安:ケイカル120kg/10a、ようりん30kg/10a)を積極的に施用しましょう。

